

「さつもん」って何だろう？

国際理解
環境

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



擦文土器。すべてではないが、表面をこすったような「擦文」が入った土器がある。(写真: 帯広百年記念館埋蔵文化財センター蔵: 2)

本州中西部で古墳時代に入っても、北海道の人々は、縄文時代と同じ「自然のもので命や生活を成り立たせる文化」を続けます。といっても、変化がないのではありません。南は本州と、北はサハリンや大陸との交流があり、暮らしや文化は少しずつ変わっていきました。

およそ1,200年前(7~8世紀ころ)、それまで1万年もの間、土器の表面をかざっていた「縄文(縄を転がすなどしてつける文様【もよう】)」が、土器から消えました。

かわって、木のへらなどでこすったあとがつけられるようになります。この「擦った文様」を「擦文」といい、この土器を「擦文土器」、この時代を「擦文時代(~12、13世紀)」と呼びます。



(上) 擦文文化(緑)は北海道から本州の東北地方北部にまで広がった。(右) その前からオホーツク海側からサハリンや千島列島にはオホーツク文化(紫)が広がっていて、たがいに影響しあった(右ページ)。(『アイヌの歴史と文化』より、改変)

暖かくなったころ

8世紀ころは、いちど寒くなった気候がまた暖かくなっていくころです。およそ6,000~5,000年前の「縄文海進(p84)」の時ほどではないのですが、10世紀の末ころには今より海面が高くなり、少し陸地がせばまったよう



です。

こうした暖かい気候のもとで、擦文文化は広がっていきます。北海道のほとんど、本州東北地方の北部、サハリン南部にまで広がります。

かまど登場

このころには、川の河口の近くの丘や海ぞいの丘が、暮らしの中心だったようです。一方で、川をさかのぼった中流にも、小さな集落がつくられていました。

浦幌十勝川(かつての十勝川下流部)を見下ろす丘の上や池田町の利別川下流(かつての十勝川)の近くに、家が建てられていました。縄文時代と同じく、地面をほり下げて床を低くした「竪穴式」ですが、形はすべて四角形です(角は丸い)。(竪穴式住居 p85) 床のまん中にたき火をする「炉」があるだけでなく、料理で煮炊きをするための「かまど」が壁ぎわに作られていました。(十勝太古川遺跡・池田3遺跡)



池田3遺跡(池田町)で見つかった、かまどのあとがある竪穴式住居あと。けむり出しの道がみぞとなって残っている(円内)。(写真: 池田町教育委員会蔵)

1 8世紀(8せいき): 本州中西部では都が奈良の平城京に移され奈良時代になり(710年~)さらに、都が京都の平安京に移され、平安時代(794年~)になるころ。
2 帯広百年記念館埋蔵文化財センター(おびひろひゃくねんきねんかんまいざうぶんか

ざいセンター): 帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館
3 かつての十勝川(かつてのとかちがわ): 十勝川は、昭和38年(1963)の工事までは浦幌十勝川を流れ、昭和12年(1937)の工事までは池田市街近くを流れていた。(p190・208)

くぼみになって残る家のあと ... ホロカヤントー^{たてあなくん} 竪穴群

大樹町^{たいきちょう}晩成^{ばんせい}にあるホロカヤントー沼^{ぬま}と太平洋^{たいへいよう}を見下ろす丘^{あか}の上に、「ホロカヤントー^{たてあなくん} 竪穴群」があります。

ここには、擦文時代の竪穴式住居のあとが残っているのですが、まだ完全にうまりきらず、地面^{ちめん}がくぼんでいます。そのため、発掘^{はくつ}しなくても、測量調査^{そくりょうちゆうさ}（ポイントごとに位置^{いち}と地面の高さ^{たか}を測る調査）をすることで、竪穴^{たてあな}の位置^{いち}や数^{かず}、分布^{ぶんぷ}状況^{じょうきょう}がわかります。

このホロカヤントー竪穴群では、オホーツク式土器^{しきどき}というサハリンから北海道のオホーツク海沿岸^{えんがん}に広がった「オホーツク文化^{おほーツくぶんか}（このページの下項目参照）」の土器^{どき}が見つかっています。

復元^{ふくげん}された家^{いへ}もあります。海を見下ろして当時の暮らしを思いうかべてみましょう。

十勝^{じゅうとく}の擦文時代の集落^{しゅうらく}は、河口^{がこう}近くから太平洋^{たいへいよう}ぞいの丘^{あか}（海岸段丘^{かいがんだんきゅう}）の上^{うへ}にあります。内陸^{ないりく}の川^{がわ}ぞいにもありますが、どちらかというときと小さなものが多いようです。



ホロカヤントー竪穴群^{たてあなくん たいきちょう}（大樹町）にある竪穴式住居^{たてあなしきじゆうきょ}あとのくぼみ。



復元された擦文時代の竪穴式住居^{ふくげん じゅうとくだい たいあなしきじゆうきょ}（ホロカヤントー竪穴群^{たてあなくん たいきちょう}）。



ホロカヤントー竪穴群^{たてあなくん}の位置^{いち}。大樹町^{たいきちょう}字晩成^{ばんせい}2

もう少し細かいこと

オホーツク文化

擦文時代より早い5世紀ころから、サハリン、北海道のオホーツク海側^{うしろがわ}や千島列島^{せんしゅうりゅうとう}に、海獣^{かいじゅう}（トド・アザラシなど）の狩りをおこなって暮らす人々による「オホーツク文化」が広がりました（左ページ図）。ホロカヤントーに住んでいた擦文文化の人たちは、このオホーツク文化と交流があったようで、遺跡からは「オホーツク式土器」が見つかっています。

オホーツク文化は、擦文文化と交流しながら「トビニタイ文化」などを作りますが、北海道では9世紀ころになると、擦文文化に吸収されます。

10世紀以降の気候変動

温暖だった約6千年前のあとも、気候は寒くなるだけではなく、寒暖をくり返しています。そして、暖かくなるごとに海水の量が増え海面が高くなるため海岸線が内陸に入りこみ（海進）寒くなれば海岸線が沖に下がります（海退）。

10世紀末～11世紀は海進（暖）、12世紀～14世紀末は海退（寒）、14世紀末～16世紀末は海進、16世紀末～17世紀は海退、というように気候は変化してきました。

最後の海退期は世界的に寒い時期（小氷期）で、江戸時代に入っていた本州では農作物が不作になることが多く、寛永の大飢饉（寛永19～20年〔1642～43〕）が起きました。

糸つむぎがおこなわれる

せんいとは、フキのスジやヒツジの毛、カイコのまゆなどのことです。糸はこのせんいを集めて、引きのばしながらねじり、より強く、より長くしたものです。これを糸つむぎといいます。かつて、この糸つむぎをおこなう時に使われたのが、「紡錘車」です。せんいを紡錘車に差しこんだ棒に結び、紡錘車を回転させてよりじりながら、その重さでのばしていくものです。

この紡錘車が、十勝太古川遺跡でたくさん見つかりました。

擦文時代に入り、

人々は糸をつむぎ、その糸を使って布を織るようになったのです。

ただ、どんな糸をつむぎ、どんな布を織っていたのかは、見つかっていないためにわかりません。生き物からとったせんいは、多くが土にかえてしまうためです。



十勝太古川遺跡（浦幌町）で見つかった紡錘車。イラストは紡錘車の使い方。

（写真：浦幌町教育委員会蔵）

4 トビニタイ：羅臼町（らうすぢょう）海岸町の地名。飛仁帯とも書き、飛仁帯小学校がある。
5 オホーツク文化（オホーツクぶんか）：知床しれとこ半島では擦文文化の遺跡が見つかる。

6 飢饉（ききん）：農作物があまりに不作なため、食べ物が少ない、人々が飢（う）え苦しむこと。